



本町ほのぼのだより 第28号

発行：中野区立本町図書館 中野区本町2丁目13番2号 TEL 03-3373-1666

発行年月日：平成27年12月26日 第28号

第28回 本町図書館 個性づくりテーマ展示

じゃぱん・すたいる

本町図書館では、『文化・芸術・芸能』に関する資料を、絵画や音楽、工芸、伝統芸能など幅広い分野にわたって収集・展示をしております。

第28回目となる今回は、「じゃぱん・すたいる」と題して、「日本の服飾」をテーマにした展示をお届けします。

時代劇や大河ドラマを見ていると、その時代特有の服装や髪型が目につきます。たとえば、甲冑と言っても、古墳時代の甲冑と戦国時代の甲冑はまったく違います。また、着物も平安時代の十二単と現在私たちが着ている着物は、異なります。そして、髪型も時代によって様々な形が現れます。

今回の展示では、日本の甲冑や服装、髪型に関する資料を集めています。新しい年を迎えるこの機会に、日本独自の服装や髪形について考えてみてはいかがでしょうか？



展示場所：本町図書館 2階書架

展示期間：平成27年12月26日(土) ～ 平成28年2月25日

※ 展示資料は貸出もできません。



甲冑の変遷

戦い方・武器の変化に伴い甲冑は変化を遂げてきましたが、命を守る重要性から当時の最高の知恵と技術をもって作られました。また、日本の甲冑は世界の中でも色彩豊かで美しく且つ、実用性を備えた工芸品として世界の注目を集めています。日本の甲冑はどのように変化してきたのでしょうか。

【弥生時代・古墳時代・奈良時代】

甲冑の原型は弥生時代に成立し、素材は木製や皮革製でした。それは日本独自の様式で「短甲」と呼ばれ、板等のパーツを紐や鋌で繋げたベスト状の、胴を守る丈の短い甲で屈伸性がありませんでした。古墳時代には甲冑の大半は鉄製になり、「短甲」の他に「挂甲」が登場しました。挂甲は「小札（鉄や革の細長い板）」を重ね紐や革で縦・横に繋げたもので、丈が長く大腿部まで覆い屈伸性があり、騎乗した騎兵が使うのに適していました。また、甲冑には隙間を覆う「小具足」があり、「頸甲・肩甲・籠手・臍当」を用いました。冑には「衝角付冑」「眉庇付冑」の2種類があります。奈良時代は古墳時代からの継続で、短甲と挂甲が主として使われていましたが、この時代の遺物は少なく、奈良時代の甲冑の全容を知る遺品は今のところ見当たりません。

【平安時代・鎌倉時代】

平安時代には各地の豪族や、下向した下級貴族が軍備を蓄え部族間の争いが起こりました。戦い方も徒歩戦から騎馬で弓を射る「騎射戦」に変わり、この戦い方に適した「大鎧」が作られました。大鎧は挂甲から変化したもので、小札を糸や細かい革紐で威し（上下の小札を繋ぐ縦縫い）て作られました。平安期は大鎧の完成期で、以後の甲冑の基準となる各種部分の形式が整いました。大鎧は兜・胴・袖の3つが一体となった本格的な甲冑で、騎乗での戦いを前提とし、馬上で体を自由に動かします。大鎧は隙間が多くても体の自由が効く方が便利とされました。また、両手で武器を持って攻撃できるよう楯ではなく大袖を用いました。その他、主要部分以外に「逆板・柵檀板・鳩尾板・草摺・脇楯」等の部分から構成されます。草摺は大腿部を防御するため胴の下に4枚装着され、小具足には「籠手・臍当」を用い馬上での体の隙間を防御しました。兜は「星兜」。鉢の表面にいくつもの星（鋌のこと）を付き出し、肩先まで達する大きな「しころ」を下げっていました。

【南北朝・室町時代】

南北朝時代は平地よりも山岳戦が多くなり、戦い方もこれまでの一騎打ちの騎射戦から徒歩戦になりました。武器も打物（刀や槍等）が多く使われ、身軽に動ける甲が求められました。そこで登場したのが「胴丸」。胴丸はもともと下級武士が使用した、胴を丸く包む略装の鎧でした。しかし上級武士も重い大鎧から、身軽に動ける胴丸に兜と袖を付けて使用し始めました。また「腹巻」も登場しました。胴丸と腹巻の違いは引き合わせる場所の違いで、胴丸は右脇、腹巻は背中となります。胴丸・腹巻は大鎧のずんどうとは違い腰の部分がすばまり、鎧の重みを肩ではなく腰で担うことができたため、機敏な動きが可能になりました。

草摺は足捌きをよくするため7、8枚と細かく分けられました。また、打物による戦いが盛んになると、胴・草摺の丈は短くなり、それを補うため小具足で隙間なく体を覆う傾向が強まり、「半頬はんぼお・佩楯はいだて・喉輪のどわ・大立拳おおたてあげ・臙金よぼろがね」等が用いられました。兜は星を潰して表面を平らにした「筋兜」が生まれ、しころは戦闘時、腕の動きを妨げないよう横へ広がり、首を守る必要から小型化し、首周辺部分を囲むようにしました。

* 「胴丸」「腹巻」・・・ここでは右引き合わせを「胴丸」と呼び、背中引き合わせを「腹巻」と表記していますが、室町時代以前の呼称は逆になっていました。

【戦国時代】

戦国時代は戦い方が個人戦から集団戦に移行し、接近戦では槍が最も有利な武器として使われました。更に鉄砲も使われ始め、甲冑はより頑丈で身軽な動きが求められました。そこで登場したのが「当世具足」という新しい様式の甲冑で、胴・兜・袖に「小具足」も含めた一揃いをいい、胴と小具足で隙間なく体を覆い防御力を一層高めました。基本的に胴丸が発展したもので、これまでは小札を威して作っていましたが、横一段を「板札」と呼ばれる一枚の鉄板で作る手法が生まれ、板札を鋏留めしたり革で綴じたりして作りました。これは槍や鉄砲に対して強い防御力を見せますが、小札を威して作った甲冑と違い屈伸性がなく、そのまま着脱できませんでした。そこで、胴全体を縦方向に2~6枚の部分に分け蝶番で繋ぎ着脱しやすくしました。室町期まであった袖は打物戦に対応すべく小型化し、草摺は足捌きをよくするため、「揺糸ゆるぎいと」という長い紐で胴部と繋げ、7枚5段のものが最も多くなります。小具足は鉄砲からの防御力を高めるため、更に強化して「頬当ほおあて・喉輪・籠手・臙当・佩楯・襟廻しえりまわ・小緒こびれ・脇曳わきびき・腰鎖こしぐさり」を用いました。兜は従来の星兜・筋兜に加えて鉄板3、4枚で作られた、「頭形兜ずなりかぶと」「突盔形兜とっばいなりかぶと」等が使われるようになります。兜は実用本位でありながらも、各武将の好みに合わせた奇抜なデザインの「変わり兜」も使用されました。

* 「南蛮胴具足」・・・戦国期はより強固な甲冑が求められ、南蛮貿易で鉄砲の攻撃に強い前後1枚の鉄板でできた「南蛮胴具足」を輸入しました。しかし、大きくて重く、高価だったため、これを真似た「和製南蛮胴具足」が作られました。特徴は正面の胸から腹にかけて盛り上がっていること。

【江戸時代】

太平の世となった江戸時代には、甲冑は武家の権威を示すものとなり、中世の復古調の甲冑が盛んに作られました。それらは装飾性を重視し実用性は無視され、しかも、大鎧・胴丸・腹巻を区別し特徴づける決まりごとまでが破られるようになりました。江戸期の甲冑は戊辰戦争で一部使用されましたが、洋式の銃弾には太刀打ちできず、日本甲冑の役割は終焉を迎えました。

参考文献

- 『日本甲冑図鑑』 三浦一郎著 新紀元社 2010年 756.7ミ
『図説戦国甲冑図鑑』 学研 2003年 756.1ズ
『日本服飾史』 増田美子編 東京堂出版 383.1ニ



着物の歴史

昔の日本人はどのような服を着ていたのでしょうか？古代の日本では埴輪や古墳に残された壁画に見られるように、隋や唐などの影響を強く受けた服装をしていたようです。しかし、それは役人などの姿で、庶民の姿は分かっていません。この唐風の衣装は平安時代の初期まで着られていましたが、894年に遣唐使が廃止になると唐の影響が薄れ、日本独自の着物が発展していきました。

『枕草子』の清少納言や『源氏物語』の紫式部などが活躍したのは、それより少しあと、平安時代の中期になります。『源氏物語』というと、「十二単」を着た女性たちを思い浮かべますが、この時代も実は女性の服装についての詳細は分かっていません。『源氏物語絵巻』では十二単を着た姿などが描かれていますが、これは『源氏物語』が書かれてから100年以上経ってから描かれたもので、その時代の女性の格好を元にして描かれているため、正しい姿とはいえません。ただし、当時の文献の記述から想像するに、十二単とよばれるものが生まれたのは確かにこの平安中期であるようです。そしてこの十二単、本当に十二枚だったというわけではありませんでした。重ね着をしていたのは事実ですが、その時々で重ねの枚数は異なっていたようです。また、十二単をすべて着ると15～20キロほどになり、重たすぎて動けなかったのでは、と考えてしまいますが、実際はもっと軽かったと考えられています。それは当時のカイコは原種に近いため、吐き出す絹の糸が現在のものより細く、それによって作られた生地は今より薄かったと考えられるからです。そこから計算すると、重さは8キロくらいになり、現在復元されているものの半分くらいの重さになるそうです。

現在の着物は、この十二単の下に着るいわば下着として着ていた「小袖」が徐々に表着として着られるようになって、進化してきたものです。とはいえ、十二単は貴族の着物であり、庶民はもともと小袖を表着として着ていました。武士が台頭してくる鎌倉時代頃から貴族と庶民の服装が混じり始めました。そして室町時代になると、小袖が一般的に表着として着られるようになります。下着だったころには白無地が多かった小袖が、表着となることで染色されカラフルになっていきました。つまり、現在の着物は室町時代ごろから始まり、江戸・明治にかけて徐々に現在のスタイルとなっていきました。

また帯の歴史も、『古事記』や『万葉集』に記述が見られるほど、古いものです。しかし、帯が現在のように表面に出るようになったのは、やはり小袖を表着にした室町時代のころ。もともとは着物がはだけないように固定する紐や幅の細い生地だったものが、江戸時代になると次第に幅が広く、長くなっていきました。幅が広くなることで、装飾が増え、帯が華やかになっていきます。そして、結び方も工夫されるようになり、江戸時代にはたくさんの結び方が考案されました。結びの位置は今では後ろと決まっていますが、江戸初期までは位置も決まりはなく自由に結んでいました。

参考文献

『すぐわかる着物の美』 道明美保子 監修 東京美術 2005年 383.1ス

『素晴らしい装束の世界』 八條忠基 著 誠文堂新光社 2005年 383.1ハ



髪型の移り変わり

【平安時代・鎌倉時代】

女性はみな「垂髪」が主流となり、700年以上も続きます。『源氏物語絵巻』にあるような、両頬にかかる髪の一部を短く切った「鬢批ぎ」のある垂髪は「大垂髪」といい、裾まで豊かに流れる黒髪は十二単の衣装で一層美しく引き立ちました。しかしすべての女性が直毛ではなく、『男衾三郎絵詞』には縮毛の女性が描かれています。

一方庶民は、労働や生活環境によって短めの髪を元結で束ねたりしていました。貴族から一般男性まで付けた烏帽子は「烏帽子下」「たぶさ」という鬘を結って固定し、日常、就寝時も離しませんでした。これは室町時代まで続きました。

【室町時代・桃山時代】

「唐輪鬘」は頭上高く束ねた鬘で、歌舞伎踊りの創始者、出雲の阿国が結っていました。「玉結び」は長い髪を輪にした結び方で、菱川師宣の代表作『見返り美人図』にみられる髪型です。

「月代」は月しろ、逆気などともいい、戦場に臨む武将が兜を被る時、逆上せないよう頭上の髪を剃ったものでした。当初は毛抜きを使って抜いていたようですが、非常に苦痛だったため、次第に剃るようになりました。剃刀を使った第一人者は織田信長と言われています。ちなみに「月代」の語源は「さかさまにのぼするいきをぬくため、髪をそりたるゆえ、さかいきというなり」と『貞丈雑記』にあります。

【江戸時代】

「若衆鬘」は前髪を落とさず少年に結われた鬘です。江戸初期に男色が盛んになり、美少年の若衆歌舞伎が流行しました。

「男鬘（銀杏）」は二つ折り（俗に丁鬘）で全期を通して一般男性に好まれ、後期になると鬘が大きめになりました。これを大銀杏といい、現在でも力士が結っています。

女性の髪形は男性の髪形が変化したものが多くありました。中でも「島田鬘」は若衆鬘が変化したもので、日本髪の代表的な髪形の1つです。女性に幅広く愛され、様々な名称で形を変え、端正で清楚な「高島田」は今日の花嫁の髪型になっています。

その他「兵庫鬘」「勝山鬘」「筭鬘」等、日本髪の原型が次々と考案され、結い髪史上もっとも種類の多い時代でした。

参考文献

『日本の髪形と髪飾りの歴史』 橋本澄子 著 源流社 1998年 383.5ハ

『黒髪の文化史』 大原梨恵子 著 築地書館 1988年 383.5オ

『図説戦国女性と暮らし』 学研 2011年 382.1ズ



展示図書リスト

書名	著者	出版者	出版年	分類記号
時代考証家が教える江戸の暮らしがわかる本	山田 順子 著	実業之日本社	2015	210.5 ヤ
日本衣服史	増田 美子 編	吉川弘文館	2010	383.1 ニ
浮世絵美人の髪形	谷川 秀雄 著	まつ出版	2015	383.5 タ
絵で見る江戸の女子図鑑	善養寺 ススム 文・絵	廣済堂出版	2015	384.6 セ
きものの基本	全日本きもの振興会 編	ハースト婦人画報社	2015	593.8 キ
江戸の美きものデザイン	女子美術大学 監修	東京美術	2011	753.0 エ
日本の刀剣		榎出版社	2015	756.6 ニ
変わり兜×刀装具	大阪歴史博物館 編著	青幻舎	2015	756.7 カ
戦国武将武器と戦術	小和田 泰経 監修	榎出版社	2015	756.7 セ
変り兜	橋本 麻里 著	新潮社	2013	756.7 ハ
すぐわかる日本の甲冑・武器	棟方 武城 執筆	東京美術	2012	756.7 ム

日本の服飾について調べてみよう！

今回ご紹介した以外にも、服飾に関する図書はたくさんあります。また、図書のほかに、雑誌記事、新聞などでも調べられます。いろいろな情報源を使って、調べてみましょう。

1. キーワードを使って調べよう

次のキーワードを参考にして調べよう。

着物	和服	装束	民族衣装	甲冑	防具
髪型	髪飾り	装身具	装飾	衣装	服飾

2. 基本的な情報源を使って調べよう

辞書・事典類を使って、テーマについての基本的な事柄を押さえよう。

書名	請求記号	所蔵館
原色 日本服飾史	383.1 イ	本町・中央・江古田
日本服飾史辞典	R 383.1 ニ	(本町なし)中央
被服学辞典	593.0 ヒ	本町・中央

3. 図書を探そう

図書館では、関連分野ごとに図書が並んでいる。[テーマの棚]を実際に見て、図書を探そう。

分類	請求記号	分類	請求記号	分類	請求記号
服飾	383.1	冠帽・履物	383.2	装身具	383.3
襟巻	383.4	髪型・髪飾り	383.5	衣服	593
軍服	395.5	甲冑	756.7		

図書館のホームページやOPACを使って、図書を探そう。



【中野区内に図書があるか】

●中野区立図書館ホームページを使って調べよう。

→ <http://www3.city.tokyo-nakano.lg.jp/tosho/index.asp>

【東京都内に図書があるか】

●東京都立図書館のホームページを使って調べよう。

→ <http://www.library.metro.tokyo.jp/>

【国内に図書があるか】

●国立国会図書館のホームページを使って調べよう。

→ <http://www.ndl.go.jp/>

4. 雑誌・新聞記事を探そう

●中野区立図書館で所蔵している主な雑誌

タイトル	所蔵館
芸術新潮	本町・中央・鷺宮・東中野・江古田
美術手帖	(本町なし)中央・野方

●中央図書館参考室の雑誌新聞記事索引データベースを使って調べよう

日経テレコン21	1975年からの日経4紙(経済・産業・金融・流通)の新聞全文や企業情報などが検索可能。
聞蔵IIビジュアル	朝日新聞のほか、知恵蔵・AERAなどが検索可能。
MAGAZINE PLUS	雑誌記事や論文情報検索が可能。
WHO PLUS	歴史上の人物から存命中の人物について検索可能。
官報情報検索サービス	1947年から当日までの官報が検索可能。
D1-Law.com	判例などの法律情報が検索可能。

5. 関連機関で調べよう

●文化学園服飾博物館

住所: 東京都渋谷区代々木 3-22-7 TEL: 03-3299-2387

日本にとどまらず、世界の服飾を専門に扱う博物館です。ホームページには、所蔵品の検索が出来るデータベースがあります。

●杉野学園衣裳博物館

住所: 東京都品川区上大崎 4-6-19 TEL: 03-6910-4413

日本で最初に開館した衣裳博物館です。収蔵資料は、日本の着物や女房装束、民族衣装などがあります。ホームページでは、博物館が所蔵する衣裳の画像が閲覧できます。



本町図書館からのお知らせ



本町図書館個性づくり展示「じゃぱん・すたいる」はお楽しみいただけましたでしょうか。これからもみなさまの身近にある、お役に立つ図書館、新しい発見のある図書館を目指して、スタッフ一同取り組んでまいります。



☆おはなし会☆

毎週土曜日 11:00~11:30
第4水曜日 15:30~16:00
児童室にて開催中！
第4土曜日は乳幼児向けの
「おひざでだっこのおはなし会」

☆個性づくり展示☆

下記の個性づくりの本は展示しています。

第二十四回・西洋画
第二十五回・彫刻
第二十六回・妖怪画・幽霊画・地獄絵
第二十七回・カメラ

年末年始のお知らせ

12月29日(火)から
1月3日(日)まで
お休みします。



第一回～第二十三回の
個性づくりの本は
一般書架にあります。

「本町ほのほのだより」
第29号は2月27日
発行予定です。

☆1月・2月の休館日のご案内☆

<1月>

12日の火曜日

29日(金)・館内整理日

<2月>

8日の月曜日

26日(金)・館内整理日

